

## 関東 CAE 懇話会 ナイトサイエンスに関わって その3

正田 秀明

近頃、齢のせいかナイトサイエンスを楽しむ機会が減って些か残念であるが、まだ残暑厳しい9月の初旬、ある会社のイベントで平野理事長にお会いし、来場されていた東大名誉教授矢川元基先生、安武健司氏（関西CAE懇話会幹事）と久しぶりにナイトサイエンス・トークで盛り上がった。

もっと頻繁にこういう機会を持ってご高見に接する事が出来たら良いな、と思った次第である。

第19回関東CAE懇話会は2012年1月23日「音と振動のCAE」をテーマに工学院大学新宿キャンパスで開催された。

「音」をテーマにするならば、ナイトサイエンス講演も「音の話」がふさわしい。そこで「プロはだしレベルで音楽に関わっている方」と認識しているお茶の水女子大学 伊藤貴之先生に講演をお願いした。（この講演や後のお付き合いを通じて自分の認識をはるかに超えたホンモノ音楽家であることを如実に知らしめられました、...）伊藤先生は国立大学の教授でありながらご自分の研究室のホームページはトロンボーンを演奏するカッコ良い写真から始まり、自身がプロミュージシャンと組むバンドの公演スケジュールを常時掲載しているのはこの人ぐらいだろう。しかも演奏のみならず「大半の作曲を担当し」「全曲のアレンジ・伴奏作成を担当している」と。その上、「自作曲が地方FM放送局の番組オープニングソングに選ばれ、1年間毎日オンエアされ」、「デジタルアート系雑誌にて音楽関係の記事を執筆し」、「ある大学の芸術学部にて音楽の講義を担当する」という活動はまるでプロのミュージシャンかと思うほどの実績である。

頂いたナイトサイエンスの演題は「音楽を組み立て、音楽を眺める」

講演概要は「ボーカロイドの流行などもあって、コンピュータでの音楽制作は急速に、専門家のみならず一般ユーザの手に近づいている。

本講演は、コンピュータを使って音楽を組み立てる方法について紹介する。

そして、講演者の専門分野である可視化がどのように音楽制作を楽しくできるかについても論じる。」

ご自身の小学生時代からの「コンピュータ」と「音楽」の関わりを紹介され、それがそのまま今に至るも軸となる、ぶれていない研究者生活・音楽家生活を送っておられるのである。

ご本人が裏経歴といわれる自己紹介によれば、小5で電子工作とプログラミングに目覚め、中1は吹奏楽部に属して作曲に興味を持ち、中2でミキサー電子工作・自作曲を多重録音し、高3で自作曲を吹奏楽で初演、大3では大学吹奏楽団の指揮者になり、社会人7年目インディーズ活動でCDを販売、自作曲がFM番組テーマ曲に選ばれ、その4年後NHK-FMラジオ番組の挿入BGMを制作

まるでプロ音楽家の経歴である。

当日の講演は小・中学時代のカセット2台によるピンポン録音で苦勞した1980年代、シンセサイザー・シーケンサー・サンプラー・ドラム自動演奏機を駆使できるようになった1990年代、そして音楽制作の主役がPCになって今に至る「ツールの進展と音づくり」に関わった歴史を紹介された。

中でも面白かったのは実際の楽曲づくりの現場に於ける作曲者（伊藤先生＝以下C）とボーカリスト兼作詞者（女性＝以下V）の臨場感溢れる論争(?)のくだりである。

以下に再現すると

- ①PCで制作途中の曲をボーカリストに聴かせる
- (C)新曲を作ったんだけど聴いてくれる？
- (V)聴いたけど…もっと優しい曲がいい…
- (C)えーカッコイイと思うんだけどな…

(V)こんなメロディじゃ女ゴコロは歌えないの！

(C独白) …超自信作がボツになると数日は立ち直れない

②ボーカリストに歌詞を書いてもらう

(V)歌詞を書いたんだけど読んでくれる？

(C)もっと大人を描いた方が曲に合っていない？

(V)えーそんな私のキャラに合わない…

(C)それに字数がバラバラだと思うんだけど…

(C独白) …途中でキレて、最初から書きなおしになることも

③カラオケボックスで試しに唄ってもらう

(C)やっぱり字数が合っていない気がする

(V)そんな細かいこと気にしなくていいの！

(C)だったらメロディいじってもいいから

(V)それより伴奏をシンプルにしてほしい…

(C独白) …だったらお前が唄ってみろ、お前が作ってみろ、みたいな

④いよいよレコーディング

(C)もっと軽快に唄ってみたらどう？

(V)えー歌詞の内容がしっとりしてるのに？

(C)今日は調子悪いねえ、次回こそ成功させよう

(V)だってこの伴奏がうるさいんだもん…

(C独白) やればやるほど、何が正しいのかわからなくなってくる

⑤編集の最終段階

(V)もっとボーカルを大きくしてよー

(C)これ以上大きくしたら浮いてしまうでしょ

(V)てゆーか、ピアノうるさくない？

(C)そこがこの曲のミソなのに…

(C独白) …録音が終わってからも、攻防は最後まで続く

門外漢には窺い知れない曲づくりの現場が垣間見られて興味深い。

続いて「音楽制作ソフト」についての話では、コンピュータ上に展開するデータを示すことで素人にも理解できる解り易さで説明された。又、初音ミクで世に知られたボーカロイドを解説され、「コン

ピュータに歌詞と音声を与えて人声を合成することでコンピュータに歌わせる仕組み」ということで、PC音楽制作が大衆化できるのでは、という話は納得した次第である。

最後に「何でも可視化するのが本業」の中でも特に、研究室で指導学生と取り組んでいる「ビジュアル指向の音楽自動編集」「画像の印象に合わせた自動リズム選択」「大きな1曲の構造を可視化」等々、音に関する研究内容を紹介されたが、

可視化している事象は…任務の時間的推移

-プロジェクトのガントチャートに似ている

-きっと例えば、製造プロセスも全く同じように可視化できる

として、きちんとCAE懇話会メンバーに響くメッセージで講演は終えた。

「メロディは天から降ってくる」という、聴衆を「はぁ?!」とさせる名言を交えた楽しい講演でした。

最近、ツイッターで伊藤先生が投稿された大学のエピソードを見つけた。講義を楽しむ学生、研究を楽しむ院生達、伊藤研究室メンバーが目につかびます。

『ある科目でコンピュータ・ミュージックの題材として僕自身で作曲した曲を使っているのだが、その科目の授業評価アンケートを読んだら「授業の題材だった曲をフルコーラス覚えたのでカラオケに行って探したのに見つからなかった」というコメントが。マジメに書いてるのかネタなのか解釈できない…。』

最後に、誰もが認める伊藤先生のメール話。あらゆる受信メールに間髪を入れず返信がもたらされる。学生相手にも、学界の先生方にも、音楽関係者にも、私のような業者にも。そのあまりの返信の早さから「伊藤先生からは、メールを送信する前に返信が来る」という神話が生まれている。

以上

著者プロフィール

正田 秀明

【現在の所属】  
 (株) HPC テック 顧問

【所属学会】  
 可視化情報学会

【趣味】  
 4人の孫

【現在の関心事】  
 日本のHPCの過去・現在・未来



人生を拓く智慧；気付かぬ処、  
 見えない処に本質あり・・・想  
 いが形に・・・

田中 豊喜

1. はじめに

2012年秋、関西CAE懇話会参加の前、フェルメール展開催中の神戸市立博物館に向かっていた。

お目当ては、フェルメール作「真珠の首飾りの少女」を一目見たかったからである。美術作品の造詣に乏しい筆者ではあったが、山や海などの自然美を愛する心と同様に、名画の美術鑑賞への関心が高まり、会場に惹かれるように足を運んだ。

しかし、会場は、人が溢れんばかりの混雑。鑑賞どころか満員電車に乗った状態で、押され押されながら約1分弱「首飾りの少女」に出逢うことができた。わずかな時間だったが、「首飾りの少女」に見つめられているような印象を受け、その美しいまなざしに魅せられた。もう少し鑑賞したいという物足りなさから、売店に立ち寄り、「首飾りの少女」の絵葉書と、大原美術館長・高階秀爾氏の著書「誰も知らない名画の見方」を手に入れた。

2. 白い点ひとつで生命観を表現したフェルメール

翌日、「誰も知らない名画の見方」を拝読した。本書によると、名画には、絵画鑑賞をより楽しく充実させるための見方が、写真を交え丁寧に書かれている。名画は何故名画と呼ばれるのか？巨匠はいかにして巨匠と呼ばれるのか？などが解説されている。フェルメールは、絵画の黄金時代といわれる17世紀のオランダを代表する画家の一人である。精緻な写実の画家というのが彼の一般的評価である。高階氏によると、ときには画家は、現実にはありえない不自然な光や歪（ゆが）み、無造作な描写を駆使し、本物以上の現実味を作り出す。省略された大胆な表現によって、写実だけでは描けない“もっともらしさ”（本質）を生み出すという。



講演中の伊藤先生



講演に聴きいる正田さん始め参加者



講演終了後の伊藤先生